

## 2014年度助成事業「地域ホスピス相談支援の実施」報告書

特定非営利活動法人緩和ケアサポートグループ

### はじめに

高齢化やがん患者の増加に伴い、在宅療養支援の充実が課題とされるなか、治療の多様化、地域のケア提供資源の不足、家族の介護力の低下等が相俟って、在宅ホスピスケア実現に関わる問題は増加、本人と家族の悩みは複雑化している。

当NPO法人は東久留米白十字訪問看護ステーション（以下ステーション）と協働で「ふらっとカフェ@東久留米」を開催して多様な相談に対応し、専門職からの助言や情報提供による療養の方向づけなど、活動の実績を重ねてきた。この活動を基盤として、ステーション内のスペースで定期的に相談支援活動を行うことを構想し、2013年度日本財団助成事業「地域ホスピス相談室の整備／訪問看護ステーション改修」により、「ふらっと相談室\*」を開設した。専門的に相談に従事する人員が在室することで、近隣地域住民に対して、在宅ホスピスケアに関する情報提供、治療からホスピス緩和ケアへの移行の相談支援、在宅療養中の患者・家族の困りごとの相談などにあたることが可能となった。

2013年12月半ばに開室して以来、「ふらっとカフェ」参加をきっかけに相談日に来室するようになった利用者、案内チラシやステーション等からの紹介による利用者が漸増、少しずつ地域に認知されている。

今後も地域の多機関との連携を密にしながら地域療養者のニーズに応え、安心感をもって住み慣れた地域で生活していくことが可能になるように地域ホスピス緩和ケア相談活動を継続していきたい。

\*名称は計画時点でステーションの統括管理者である秋山正子氏に相談し、「暮らしの保健室 in 東久留米（ふらっとカフェ）」としたが、長すぎて使用しにくいことから「ふらっと相談室」として開室した。

### 相談室の利用状況

・利用者数（詳細は別紙一覧表に記載）

2014年4月～2015年3月の期間中、相談室のみの開室は108回、ふらっとカフェとしての開室は11回であった。相談室のべ利用総数は333名（内、カフェ参加者132名）、ほかに電話利用者12名であった。

・相談例（相談室日誌等の記録は相談室に保管管理）

〈がん療養者〉

Mさん（第1回カフェから参加、60代女性）：

- ・乳がんの再発後可能な限りの治療を試みているなかで、夫と暮らしていても寂しさがある。いつでもふらっと立ち寄れる場所がほしいと訴えた。
- ・初めは再発のない人との間に「大きな溝を感じる」と語ったが、カフェに参加するうちに落ち着ける居場所となり「溝はなくなった」と変化した。
- ・病状の進行にとまどない、在宅療養体制の相談にのり、ステーションのケアマネージャーにつなげることができた。

Nさん（第9回カフェから参加、50代女性）：

- ・大腸がん治療後、肝臓転移
- ・肝臓転移の治療法に関して、カフェ参加者の肝臓がん患者（製薬会社勤務）の助言でセカ

ンドオピニオンを受け、その病院で治療を受けた。

- ・大腸がん再発、肝臓がんの再燃などに対処しながら平静に生活を続けている。
- ・相談室には時折来室しスタッフやカフェの知己との会話を楽しまれている。

**Eさん**（カフェや相談室のチラシを見て来室、70代男性）

- ・肺腺がん StageIV治療中、全身に転移あり、分子標的薬の効果がなくなっている。
- ・その他多数の疾患治療中
- ・「満身創痍でどうしたらよいかわからない」と、繰り返されることを丁寧に傾聴、次第に死生観についての話もできるようになってきた。
- ・積極的にカフェにも参加されている。
- ・その後、経過に寄り添い本人や夫人に適宜連絡をとっている。

〈家族〉

**NHさん**（第25回カフェから参加、60代女性）

- ・夫が膵臓がん術後3年、活気がなく痛みも訴えているとのこと。カフェのがん療養者のグループで話し合い、その後電話での確認を経て相談室にも来室。受療病院の緩和ケアチームを紹介した。

**Oさん**（第25回カフェから参加、70代男性）

- ・近隣に越して以来、妻の体調が不良で今後の介護の必要が気になる。妻とのコミュニケーションはうまくとれていない。
- ・カフェ後にステーション所長と訪問看護・介護について面談し、訪問看護の実施につながった。
- ・後日、妻を相談室に同伴された。さらに夫妻揃ってカフェにも参加された。

〈遺族〉

**Uさん**（第6回カフェから参加、50代女性）

- ・難病の夫が在宅療養中に誤嚥で急死、一人暮らしとなった。
- ・夫の死後3週間くらいの時、駅のポスターとHPでカフェを知って来室された。深い悲嘆の時期にうつ病の診断も受けて服薬治療となったが、カフェ参加者に支えられて過ごした。
- ・一昨年夏に子宮頸がんが発見され、化学療法と放射線療法で縮小、安定している。
- ・カフェにも参加、相談室にも頻回に「誰かと話したくて」来室される。

**Yさん**（第30回カフェから参加、60代女性）

- ・昨年娘さんががんで亡くなった。深い悲嘆があるが、同じく深い悲嘆に沈んでいる夫を支えることで精いっぱいである。夫にどう対応したらよいか悩んでいると話された。小グループでは同じく遺族の参加者やスタッフが傾聴、悲嘆が和らぐには時間の経過が必要であると声かけした。夫と離れてたくさん話せてほっとしたと語られた。

## 活動の成果と課題

相談室の利用者は微増している。ふらっとカフェを契機に利用する方が多い。療養相談のみではなく、これまで十分に話せなかった思いを時間をかけて傾聴、共感することが求められている。しかし、利用件数は当初の計画であった60件/月にははるかに及ばない。地域の諸機関との連携強化、広報上の工夫が課題である。

相談支援内容は多岐にわたっている。それらに対応可能な相談担当者の育成と確保が求められている。具体的には、傾聴の姿勢とコミュニケーション力の学習、相談に適切に対処できる情報の収集、知識の整理等が不可欠と考える。NPO 法人とステーションの協働開催で諸学習会

を開催しているが、さらに内容を深め、事例検討会を開催することも必要と考える。

また、開設初期には専門職が中心となって相談にあたるとしても、地域に根差した恒久的な相談室とするためには、地域のボランティアの参加協力が望ましい。定年退職者、大学院生の参加などの可能性を考えていく必要があるだろう。

## **おわりに**

今般の助成により、ステーションと NPO 法人が協働して地域の療養者を支える活動を維持できた。以前から継続してきたカフェ活動が基盤となり、療養の助言を得る場として相談室を利用される方、不安や悩みをおろしてほっとできる居場所として利用される方等、多様な利用可能性がある。より一層認知され、利用されるように、今後も着実に活動を続けていきたい。